と致しましょう。ある秋の朝、落葉がたくさんちらかっているのをみつけ、Aは自分の家の前だけ掃いてBの家の前にその落葉を押しやっておきます。BはこれをみつけCの家にやります。CはDの家にそしてDはまたAの家の前にごみの山をつくります。Aはさきほど掃いたごみが家の前に舞いもどったのを発見して、みんなを呼んで聞いてみます。

みんなは、はじめて自分のところだけきれいにしていたことに気がつきます。

そしてこんどはみんなで力をあわせてお掃除をいたします。そして今度は、ほんとうにきれいになったとよろこびます。

（保育新書劇あそび　きれいになった　小池たみ子作）

この劇はくり返しの歌でつながれています。リズムにあわせてほうきを使うのがうれしくて、はじめ子どもたちはよろこんでやっておりましたが、だんだんくりかえすうちに、ほんとうのお掃除にも興味をもつようになり、みんなで一緒に片づけたりすることもだいぶ自発的にできるようになりました。

こういう所からおしてみても、たしかにほんのわずかではありますが、前述の母親のことばにもあったように、協力のこころや、責任を感じる心の芽生えといったものが生れてきたことはたしかです。

幼児たちは劇中の人物を演ることによって、具体的に、自然に、しかも自分自身で、それらのこころを感得してくれたわけです。

いま私はここに二つの具体的な例をあげてみましたが、

「お友達とは仲良くしましょうね」

「自分のことは自分でしましょうね」

と言うような概念的なことばよりも、実際に良いお話（童話、紙芝居、スライド、絵本）劇あそびなどをあたえることが、どんなに幼児の生活に良い影響をおよぼすかということを考えてみたかったのです。

こうした経験のつみかさなりが、大きくなって正しい生活のできる人間を育てる基礎となることを考えながら、私たちはつねに豊富な資料を用意して、幼児たちの心をつちかうことにつとめたいものだとおもいます。

（群馬大学付属幼稚園）

いなかの子どもたちから感じとるもの

八坂富子

私の住んでいる三原市は人口八万程の瀬戸内に面した小さな都市である。

東京から急行で十七時間、大阪から五時間ばかりのところで文化の中心地からは程遠い感がする。終戦直後、世の中がはげしい変り方をしている時に始めて三原の土を踏んだ。戦争の傷手も受けていない古い家並が軒を連ねて、落ちついた感じのする城下町である。

旅から赴任した私にとっては、すべてが生々しい経験で、地方の都市の特色とか、安芸路の印象、それに家庭生活を通して感じとる人情のあれこれ、あるいは子どもの生活が円滑にいかない苦しみ、主としてこ

とばがよく理解できないために心が通わない淋しさ、などなど。ひしひしと感じたものである。ところが十年あまりたった今日では、それを思い出すことさえもむずかしいくらい、みな土の香りに馴染んで三原弁もすらすらと出てくるくらい、抵抗を感じなくなってしまった。人間は心の扉が開かれなければ家庭生活も教育も成り立たないものである。今にして見れば早く心の扉を開きたい。園児とも近隣の人たちとも同じ仲間になりたいと云う欲求から、かなり努力をしていたようである。

このようにスタートをした三原の生活から「幼児と道徳生活」について関係のある問題を拾って見たいと思う。戦後私どもの楽園にも耳新しいことばが次々に入ってきた。カリキュラム、ガイダンスなど、ことに英語にうとい私にとってはびっくりしたものである。保育案とか生活指導ならば、もう何十年も前から取り組んでいたはず、これも漸くおちついた頃に耳にとまり出したのが道徳教育であった。私はカリキュラム運動とはまたちがった感じ方をしたのである。というのは世間一般の与論の通り、戦後の新教育に何か一本ぬけたものがある。どうしても学校教育の中に道徳教育の筋金を一本通さなければいけない。これを痛感しているときであったし、幼稚園こそ学校教育の第一歩として道徳教育をどのような形で行ったら良いか、また幼児の道徳生活とはいったいどんなものか、若し有るとしたら、どんなにして育っていくものかなどを考えて見た。

丁度今から二十年位前の古い記憶であるが、夏の文部省講習で倉橋惣三氏が「幼児教育の文化性」について長期にわたって講義をされたことがある。その中に「幼児の道徳教育が」あった。四、五年前に幼稚園の書庫を整理しながら当時の「幼児教育」を発見して食い入るように読ませていただいた。そして若き日の感激を新たにしたのである。

話はちょっと横にそれてしまったが三原市の特色として非常にお寺が多い。安芸門徒の呼名の如く仏教の栄えた土地らしい。一寸高い処から市内を眺めて見ると、山ぞいの緑の中に適当な間隔を置いて、お寺の屋根が風致を添えている。戦時中の町内会に一寺位の割合であるのではなかろうか。そして土地の人や子どもの生活と密接な結びつきを持っている。つまり地域の文化センターとしての役割も持っていて、いろいろな文化的な催しがあったり、政界演説があったり、幼稚園、保育所が経営されている。市制二十周年を経ても未だに公会堂も市民館も建たない現状としては当然である。都会で考えているお寺とは大分趣を異にしている。したがって幼児教育についても、お寺や教会を背景にして、誕生し成長してきたようである。私の園の子どもたちは市内の私立幼稚園を経由して入園する子どもが九〇％である。そこで園児の具体的な行動を通して、宗教的な雰囲気の中で成長してきた子どもであることを感じる節々がある。お話や紙芝居をしてあげた後で、誰からともなく極めて自然に「ありがとう」が出てくる。食事前の合掌なんかも、子どもでも、おとなでもそういう生活のし方を身につけているようである。幼児に「選挙って何ですか」ときいたら、〇〇寺で紙に書く」と答えるくらい、選挙の投票所になることも再々である。われわれ公立学校では宗教教育をするわけではなく、私自身も

宗教に対する教養もない。だからこそ、子どもが育ってきた宗教的な雰囲気も理解してやりたいし、もしそれが道徳的な生活態度につながるものであるとしたら、幼児の行動を通して発露したとき敏感に感じとってやりたいものである。

あの幼い子どもたちの将来の理想の人間像を描いて教育の高い目標を考えたときに、幼児を保育し適当な環境を与えて心身の発達を助長する」だけでは何か他愛ないものを感じる。人間形成をする上に大事な柱になる道徳的生活態度がこの時代に身につくものであるとしたら、大きな問題ではなかろうか。もちろん幼児教育の中では教え込んだり、おしつけたりするのではなくて、望ましい道徳的な環境の中で生活している内に自発的に出てくる態度である。そうして見ると、道徳的環境の一つである教師自身の生活態度や信念が大きな影響をもってくると思う。幼児の望ましい道徳的な態度として、二つのものを挙げられた。幼児自身の中から出てくる真心の発露と現実の理解に立つ道徳観として「事実にそくした責任感」をあげられた。さて園児の生活の上に目を転じて見ると、教師としてどれだけの道徳的な生活態度を感じとってやったであろうか。ことに寒々しいものを感じる。最後は教師自身の問題にかえってくるようである。

また田舎の特色として幼児の家庭生活が大家族制をとっている家が多い。したがって家族構成もきわめて単純な両親と未成年の子どもだけというのではなくて、祖父母とか叔父、叔母、あるいは中小企業であれば職場と生活の場が接近しているので少数の使用人などとの多岐にわたる人間関係を持っている。母親が祖父母を大切にしているとか、家族の者がみんなで助け合っているとか、使用人が家の仕事に勤勉であるとか、または全く反対の態度の場合もあるかも知れない。これらの身近な人たちの生活態度からくるふん囲気にひたっている。ここも都市の子どもと何か異ったものを持っているのではないか。

かつて私の組の玩具屋の子供に「この玩具あなたの家に売っていますか」と聞いたら「先生今きれていています」と実にすらすらと出てきたのにはさすが私もびっくりした。五歳児がすでに商売上のエチケット、感じの良いことばの使い方を身につけていたのである。

この夏久々に大阪から明石行の急行電車に子どもを連れて乗った。丁度須磨明石へ海水浴に行くお客がホームをうずめていた。やがてきれいな車がホームに滑り込むと乗車口に向けて押されて行った。その内に若い男性がバタバタと窓から飛び込んできた。人の波に押されて私が車内の中程に落ちついた頃には車は風を切って走っていた。田舎で育てた私の子どもはこんな経験は生れて始めてであろう。大阪でもらったフランス人形の箱をしっかり抱いて、泣かんばかりの表情で必死になって人間の圧力に抵抗している。「お母ちゃん」と情ない声がしたので「人の波に乗って中へお入りなさい。中は涼しいよ」といってやった。子どもは漸く安心して私のそばまで入ってきた。窓からとびこんだ若い男性たちは、ニュールックの海浜姿でさっきの醜態は忘れたかのように大きな窓から吹きこむ風をまともに受けて楽しそうに歓談をしている。私の頭の上にも扇風機がすずしい風を送っ

てくれる。私はしみじみと機械文明と精神文化のアンバランスを感じたのである。あの人たちにも幼い時から良心的な態度が正常に育っていたら、もっと明るい世の中になっているのではないか知ら。あんな大きなおとなを相手に、いくら社会教育の中で道徳を叫んで見ても中からにじみ出るような態度なんて絶望ではなかろうか。もう戦後ではない。世の中も落ちつきを取りもどしているはずである。そうして見るとわれわれ教育者の責任に負うところが大きいと思う。

（広島大学教育学部付属幼稚園）

よい気持で暮す子ども

大熊米子

家庭における幼児期の道徳教育の、すべての根本は、限りない母親の愛情であり、温かに、おちついた、いうにいわれぬ家庭の雰囲気であると思う。愛情豊かな、よい環境の中で、いつも気持よい生活をする子どもたちは、かならず身心ともに正常な発達をして、よい習慣を身につけ、ことにあたっては、正しい判断力が培われることであろう。

隣の部屋の赤ん坊の泣き声は、だんだん吸込まれるように間延びがしてきて、固唾をのむ思いでいる私が、ほっと肩の力を抜くと、またそれを合図のように、ひとしきり盛り返して、あわれに、悲しげに聞えてくるのだった。

「あら、あなた、いないのかと思ったら……かわいそうに、赤ちゃん泣いてるじゃないの」

いままで洗濯をしていたらしい手を拭き拭き、母がびっくりしたような顔を出した。「はじめが大事だから一人で寝る癖をつけようと思って我慢していたの」私のことばを聞き流して、母は急いで赤ん坊のベッドのところへ行って、静かにあやしはじめたので、私も救われた思いで、その後からついていった。

『おなかがいっぱいで、おむつがきれいなら、赤ん坊は一人で眠るべきだ』と、どの育児の本にも書いてあった。『自立の精神は、そうして習慣づけられなければならない』……と

はじめて母になった私は、後生大事と育児の本を信仰していた。……間もなく赤ん坊は、すやすや眠ってしまった。そして母は云うのだった。

「私はね、赤ちゃんが一人で寝ることができるようにならすよりも、満ちたりて、母親の笑顔をみながら、温い、いい気持で眠る方がいいと思うのよ、あなたも、そうして育てて来たのだけれど……きれいな気持で寝れば、きれいな気持で起きるし、いつもきれいな気持でいれば優しい子になりますよ、きっと……反対に、いつも淋しい気持でいたら、冷たい子になるかもしれないわ。」……それで私は、はっと思いあたった。私はずいぶん大きくなるまで、やすむときは必ず母が寝床まで送って来て、「いい